

連載:

フィルム・アーカイヴ
の諸問題
第3回映画資料・情報の集積と
公開に向けて[2]佐崎 順昭
Yoriaki Sazaki

創刊号に続いて、今号では、図書の形態(単行本や雑誌)以外の資料の実態についてふれ、今後の、資料整備の方針とそれらが抱えている問題についてみてみよう。

まず、図書に近い形態として、映画製作の過程で必要とされる撮影台本があげられる。これは、単行本や雑誌に掲載されたシナリオと違って、企画の段階や実際の撮影現場で使用する台本であり、書籍のように一般に流通するものではない。しかも、あくまで映画製作の流れにそって生み出されていくものであるため、各種の版が存在するのが特徴である。たとえば、ある企画を実現させるための検討用台本があるとすれば、その準備稿や第2稿、第3稿、決定稿、決定2稿、完成台本等、さまざまなバージョンが一つの作品に対して存在する。そうした性格上、準備段階でタイトルの確定していないものや、著者である脚本家に変更になる場合なども考えられ、整理上の採録事項としては注意しなければならないところである。また、台本と関連したものとして、梗概やコンティニューイティ(絵コンテ)、ストーリーボード、スクリプターの記録、アニメーション映画や特殊撮影の際に使用される進行台本といったものもこの範疇に入る。

撮影台本は、歴史的には監督が口立てで演出していた頃から存在し、フィルムセンターでも、天活系の映画館であった浅草大勝館の座付作者桂田阿弥笠(かつらだ・あみがさ)が使用した大正初期のもの(和紙に謄写刷したもの)から、弁士の説明用台本、製作会社が内務省に提出した検閲用台本、戦後になって映倫に審査用に提出された実際の撮影現場で使用されていた台本など、そのほか、外国映画のオリジナル・スクリプトをはじめとして翻訳台本、字幕スーパー作成用の台本など、その種類も多岐にわたっている。特殊なものとしては、監督をはじめとした各職能者の書込みのある台本も存在する。

現在、フィルムセンターでは、映倫管理委員会から審査済の台本が定期的に寄贈されており、戦後公開された日本映画については相当量のものが保管されている。点数としては約22,000冊。ただし、その多くは劣化しやすい酸性紙(藁半紙)であり、製本もしっかりしていないため破損の危険性が高く、他の媒体への転写も含めて今後考慮しなければならない点である。

次に、映画の重要な宣伝材料であるスチル写真^{注1}についてみてみよう。映画のスチル写

真は、一般に映画が完成する以前に作成される宣伝用の媒体で、場面写真や扮装した出演者のポートレートなどからなっている。これはあくまでも、スチル・カメラマンによってクランクイン以前や実際の撮影(本番)の後に撮影されるもので、映画作品と同一のカットではない。極端な場合、宣伝スチルのみ存在するものや完成した作品とは俳優が代わってしまったケースもある。

しかし、ドキュメンテーションとしてのスチル写真の重要性は、出版物や研究資料において映画作品を補足的に挿図として説明するにとどまらず、特に戦前の場合など、フィルム自体が失われて見ることができない場合などに、シナリオだけでは捉えられない重要な視覚的イメージをもたしらしてくれる手掛かりにもなる。また、クレジットの欠落した作品を特定する上での重要な決め手にもなるし、ポートレートやプロマイドも含めた写真資料の蓄積は、忘れられつつある俳優や映画人のイメージを強固にする上でも役立つ資料といえよう。

形態としては、日本ではキャビネ・サイズ(11.9×16.7cm)が主流で、変わったものとしてはワイドスクリーンに対応したシネスコ判(11.0×21.2cm)があり、欧米では8×10(六つ切:19.0×20.0cm)が多く見られる。フィルムセンターの所蔵するコレクションは、戦前、大日本映画協会が所轄していた日本映画雑誌協会が、旧キネマ旬報調査部から受け継いだ1920年代から40年代までのスナップ写真を含む日本映画のスチル写真コレクションや、戦後映倫より寄贈された邦画・洋画の宣伝スチルなど、その数、約17,000作品230,000枚に及ぶ。これらのうちには、大量複写のための乾板(ドライプレート)も含まれているが、戦前戦後を通じてパラライズ紙による紙焼きはおおむね保存状態は良好である。とはいえ、保存のためのデュープネガ作成などの措置が考えられなければならないのは今後の課題として残る。

整理に当たっては、作品の確定にはじまり、大きさや、カットの種類、枚数等の確認を行い、外国映画3,780作品59,870枚に関しては完全な調査と中性紙の保存用袋(キャビネ用:14.2×20.5cm、大判用:28.8×36.9cm、2種)への入れ換えを終了した。整理期間延べ2年。

また、既成の宣伝用スチル写真とは別な形として、フィルム・アーカイヴにおけるコマ撮り写真(フレーム・エンラージメント)の作成があげられる。コマ撮り写真は、映画フィルムより直接1フレームを引き出し、特別のアタッチメント(ペローズ)によってスチル・カメラで再撮影す

るもので、小宮登美次郎コレクションの復元上映会の際の解説書である「フィルムセンター89」(1989年)の作成において初めて本格的に行なったものである。これは既存のスチル写真がない場合に行なうものだが、映画フィルムと同一のカットを再現できるため、作品分析の上でも重要な資料といえる。ちなみに、小宮登美次郎氏自身もその昔、まだ輸入外国映画のスチル写真が手に入らなかった時代に、同じような方法でコマ撮り写真を作成し、帰山教正氏らの雑誌「キネマ・レコード」に提供していたとのことである。

映画ポスターは、ただ単に映画関係資料や宣伝媒体であるにとどまらず、それ自体が一つの作品として語られる場合が多い。それは映画ポスターがグラフィック・アートの一分野として確固とした地位を築いているからである。映画が誕生したときにすでにポスターは商業デザインとして認められた存在であり、現代の広告活動の一端として映画産業が発展していったため、当然映画ポスターも時代の流行や風俗、意匠に微妙に影響され、また影響を及ぼしながら、印刷技術の進歩に伴って、文字と図像からなる数多くのデザインを生み出していった。そのため、カタログに際しては、スチル写真の場合の写真家以上にデザイナーの名前が重要であり、個別の映画ポスターを集めた図版集もいくつか出版されている。

配列や保存に際しては、その大きさが問題となる。日本映画の場合、概してB系列の判型が多く、B2サイズの半裁ポスター(51.5×72.8cm)が主流で、B2縦半分のスピード・ポスター(文字情報のみで作品を告知するもの)、B2縦2枚組の立看ポスター、B1・3枚組のCポスターなど大きさにヴァリエティがあり、欧米の場合はA系列が主流となっている。そのため、収納には大きさごとにまとめた方が

オーギュスト・リュミエールを訪れた文部省学芸官 中田俊造
1931年6月23日(辻恭平氏寄贈)

効率がよく、フィルムセンターでは既製品のA1のマップケース(スチール製)に加え、B1のマップケースを特別注文で用意し、その他のサイズは中仕切りによって対応している。保存方法では、裏打ちの必要性など費用面でも問題となるところである。

コレクションの内容としては、日本映画雑誌協会旧蔵の戦前の日本映画のものや、批評家で映画輸入業者・一立商店、日蘇商会等に関係していた袋一平の蒐集した1920、30年代ソビエト映画ポスター、また、映倫から寄贈された戦後の邦画・洋画のポスターなど、約19,000枚にのぼる。

次に、映画製作や配給、興行の過程で必要とされるプレス資料についてみてみよう。主に文字と図版によって構成され、製作発表から製作段階でリリースされるスタジオ・メールや製作通信、完成段階で配給系統に流されるプレスシート、試写会などでジャーナリストに頒布されるいわゆるプレス、映画館で頒布販売されるちらしやパンフレットなど、ここには一つの映画作品について、そのクレジットや解説、あらすじ、プロダクション・ノート、宣伝文案等といった各種の情報が盛り込まれ、その内容・形態も関係者だけに配布されるものから一般に販売されるものまで多種多様である。

また、歴史的に見た場合、これらの資料は映画作品を宣伝する目的で作られてきたために、業界での宣伝形態の変化を端的な形で受けてきたといえる。たとえば、映画館での興行を例にとると、はじめは演劇にならって引き札やびらであったものが、日本における初期の映画常設館の一つ浅草・帝国館が「第一新聞」という興行映画ニュースを定期的に出したことによって、他の映画館でも番組替りに合わせて週単位で〈映画館プログラム〉を発行するようになった。しかし現在では拡大ロードショーが主流になったため、戦前のような座館単位の刷り物は少なく、作品単位でのパンフレットに変化した。^{注2} こうした変化は戦後邦画各社が製作・配給・興行を決まった系統で行っていた頃のプレスシートが現在では見られなくなったことにも現れている。プレスシートは、表がB2半分の短冊状のポスターで、裏にクレジットやロゴ見本、物語や解説、宣伝のポイントや映画館内での放送文案などをのせたもので、フィルムセンターでも1960年代より70年代にかけての映倫からの寄贈分が多く保存されているが、現在ではこうした定型のものは少なく、大きさも内容も様々である。そのため、プレス資料の分類・整理・保存が最も遅れている要因ともなっている。^{注3}

以上が、主要な映画関係資料のあらましであるが、勿論これ以外にも、戦前の映画説明を録音したSPレコードやサウンドトラックのレコード、CD、録音テープといった録音物資料、戦前の家庭用玩具フィルムから9.5mm、8mm、ビデオテープやレーザーディスクといった録画物資料、撮影機、映写機や現像関係

の機材や機器資料、映画前史の玩具や機械、美術や衣装に関する資料、特殊撮影に関する資料、アニメーション映画に関するもの、または映画会社、映画人の遺した各種文書などの個別コレクション等々、数え上げていけばきりがない。

こうした多種多様な資料を前にしての、フィルムセンターにおける今後の資料整理の方針としては、分類体系や採録項目の確定および記述の統一といったことがあげられる。各資料を適正なかたちで分類し、その用語の検討をし、その上で正確に記述していくためには、各資料に関する発生的かつ歴史的な研究がなされなければならない。参考までに別表に素案ではあるが資料分類表をあげておく。

加えて、膨大な資料を情報化する上で、各資料の効率のよいつながりといったことを考えていかなければならない。たとえば、ある一つの作品があった場合、映画フィルムのカタログリングデータ^{注4}と連動した形で、その作品の35mm上映用プリントやデューペネガが何本あるか、また撮影台本、ポスター、スチル写真、プレス資料が何種何枚あるか、さらに作品に関する雑誌の記事や単行本がいくつあるかなど、一つの作品単位で各資料が関係付けられていることが望ましい。この場合、作品に関するクレジット情報(製作年や製作会社、監督や出演者など)が、同一のものとして共有できるため、一つの作品単位のデータベースが存在すれば、そこに異なる資料の形態や種別だけを登録すればよく、膨大なデータ入力の手間を考えた場合、確実に作業の省力化につながるはずである。そして、その場合も、注意しなければならないことは、たとえば日本映画でいえば、はじめから作品総目録を作るといったようなことはせず、現在コレクションとしてある資料の作品簿を作ることで、徐々にナショナル・フィルモグラフィ作りへと近付けてゆけばよく、その組織の規模や人力を無視した構想は、最初から挫折する運命にあるといえる。また、このような自館が所蔵している資料の整備が必要であると同時に、その労力の分散をはかる意味でも、他の映画関係資料保存機関との情報の交換や共有化、協力作業がなされなければならないことはいうまでもない。^{注5}

フィルム・アーカイヴにおけるドキュメンテーション部門の充実、映画フィルムの蒐集計画を立てる上でも、映画フィルムを復元し不完全版を補う意味でも、フィルムのカタログリング作業をする上でも、上映番組を企画しそれに基づいて解説資料を作る場合にも、また資料の展示を行なう上でも必要なことである。つまり、フィルム・アーカイヴのそれぞれの仕事全てとかわりを持ち、支援する役目を負っているといえる。ただし、映画保存や映画ドキュメンテーションに対する基本環境の整備が整わず、それに対する理解が多くの場所で十分に

得られているとはいえない現在の状況を考えた場合、アーカイヴの抱えている資料の性急な公開に対しては慎重にならざるを得ない。フィルムセンターにおいても、蓄積された資料は理想的にはすべて公開することを前提としているが、現在の段階では図書室をそのひとつの窓口として、暫定的にはあるが、一歩一歩公開に向けての環境作りを行なっていくしかないのがその現状である。そして、フィルムセンター図書室の基礎をになった辻恭平氏をはじめとして、映画ドキュメンテーションの整備に尽力された多くの先人達の業績を着実に受け継ぎながら、次世代に伝えていくしかないのである。^{注6}

映画関係資料分類	
図書	単行本 逐次刊行物(映画雑誌、興行通信) 撮影台本 映画祭カタログ 書籍体パンフレット 楽譜 切抜きファイル(プレス・カッティング) マイクロフィルム
	写真
	スチル写真 ポートレート(プロマイド) 原画フィルム
	ポスター
	ロビーカード(印刷スチル)
	プレス資料
録音物	撮影所通信、スタジオメール プレスシート ちらし(びら) パンフレット 映画館プログラム 試写状、特別鑑賞券 特殊宣材
	録音物
	レコード CD 録音テープ
	録画物
機器・機材	[玩具用家庭フィルム] [小型映画] ビデオ レーザーディスク
	撮影機 映写機 現像資料
	映画前史資料 美術関係資料 特殊撮影資料 衣装関係資料 アニメーション関係資料 個別文書類
	*[]は映画フィルムとして管理している。

注1：映画業界では「スチール」と表記されることが多いが、フィルムセンターでは原音に近付けてあえて「スチル」と統一した。

注2：ただし、最近になって単館ロードショーやミニシアターの普及によって、戦前とは違った形で映画館単位のパンフレットが充実してきたことも事実である。

注3：参考までにフィルムセンターで所蔵している各資料の保管場所を記しておく、図書および撮影台本は京橋4階図書室の閉架書庫内、スチル写真、ポスター、プレス資料は京橋地下3階の作品収蔵庫(温度20度、湿度50%)に保管してある。また、これらの資料のうち同一のものが3つ以上あるものについては、危険分散の意味もあって、フィルム保存庫のある相模原分館に常温で保管してある。機材関係の資料も同様である。

注4：フィルムセンターでは、FIAFの映画目録規則に準拠しながらも日本語に対応した独自のフィルム・カタログリングをクライアント/サーバ環境のコンピュータ上で行っており、この〈NFCデータベース〉については別の機会に紹介する予定である。

注5：加えてフィルムセンターでは、毎年各大学から受け入れている博物館学実習生の演習に、資料整理などの作業を行っており、過去多くの実績をあげている。